

新刊紹介

印順著 原始仏教聖典之集成

中華民國六十年二月(昭和四十六年)

A5版八七九頁(プラス一六頁)

- 第一章 有閑結集的種種問題(結集と聖典成立)
- 第二章 研究的資料参考書(律藏と論藏)
- 第三章 波羅提木叉經(戒經と戒条)
- 第四章 波羅提木叉分別(經分別とその成立)
- 第五章 摩得勒伽与捷度(律母と捷度部)
- 第六章 比丘尼・附隨・毘尼藏之組織(尼律・付隨、律藏の組織)
- 第七章 經典部類概論(四阿含と九分教)
- 第八章 九分教与十二分教(九分教と十二分教)
- 第九章 原始集成之相応教(雜阿含の成立)
- 第十章 四部阿含(四阿含各説)
- 第十一章 小部与雜藏(諸部派の小阿含―雜藏)
- 第十二章 結論(諸部派の聖典概説)

印順著 說一切有部為主的論書与論師之研究

(說一切有部を主とする論書と論師の研究)

中華民國五十七年六月(昭和四十三年)

A5版七二三頁(プラス二二頁)

- 第一章 序論(阿毘達磨論書について)
- 第二章 阿毘達磨的起源与成立(阿毘達磨の起源と成立)
- 第三章 說一切有部及其論書(有部阿毘達磨概説)
- 第四章 六分阿毘達磨論(六足論)
- 第五章 発智論与大毘婆沙論(発智論と大毘婆沙論)
- 第六章 說一切有部の四大論(婆沙論の四大論師)
- 第七章 大毘婆沙論的諸大論師(婆沙論の諸大論師)
- 第八章 說一切有部の譬喩師(譬喩師・婆須蜜・瑜伽師)
- 第九章 上座別系分別論者(分別論者・舍利弗毘曇等)
- 第十章 阿毘達磨論的新猷(甘露味論・阿毘曇心論等)
- 第十一章 經部譬喩師の流行(譬喩師・經部・成実論等)
- 第十二章 闍寶瑜伽師の發展(小乗と大乘)

の瑜伽師)

第十三章 阿毘達磨論義的大論弁(俱舍論・順正理論等)

第十四章 其余論書略述(俱舍釈その他の諸論書)

著者の印順師は中国台湾における現代唯一の仏教学者である。右の二書の目次内容によっても知られるように、原始仏教から部派仏教にわたる経律論の三藏聖典を、主として漢訳資料によって総合的に研究している。近代日本におけるこの方面の研究は多く参照され著者が独自に研究開拓している部分もある。直接にパーリや梵語の原典には当たっていないようであり、南伝大藏経を資料としている面があつて、この点では徹底的な研究とはいえないが、梵パの理解や読解力もあるようであるから、漢訳を自由に駆使できる外国人の研究としては、この分野ではもっともすぐれたものであり、わが国の学者も一応は参照すべきものである。

柳田聖山著 初期の禪史 I (禪の語録 2)

楞伽師資記・伝法宝紀

筑摩書房 四六・三月

中国禅宗の現存歴史書の中でもっとも早く成立した楞伽師資記と伝法宝記の原典の諸写本比較校訂とその国訳および注記を本文とし、序文としてこれらの史書の成立事情、その間における中間の仏教一般や禅宗の動向などを、著者の永年にわたる研究によって、詳細綿密に叙述している。本書は通俗的な読み物であるとともに、専門的立場から見ても、従来にその例を見ない、もっとも学問的なすぐれた業績であるということが出来る。著者が同シリーズ禅の語録Ⅰとして出した「達磨の語録」——二入四行論——(四十四年三月刊)とともに良参考書である。

A Primer of Sōtō Zen

A translation of Dōgen's Shōbōgenzo
Zuinonki by Reihō Masunaga East-
West Center Press-Honolulu 1971 pp. 119

本書は道元禅を西洋人に知らせるために、その入門的な「正法眼蔵随聞記」を英訳したものである。増永靈鳳教授が流布本によって英訳されたものをハワイ大学の東西文化センターの出版部から最近出されたものである。

以上 水野 弘元

今枝愛真著 中世禅宗史の研究

著者が東大史料編纂所の助教授で、本学講

師を兼ね、また『曹洞宗全書』の編纂員でもあることは周知の通りである。

すでに『禅宗の歴史』(至文堂刊)や『道元——その行動と思想』(評論社刊)などの著述もあり、これまで「主として中世禅林の成立発展と武家社会との関係について述べた論文のほか、さらに二、三の新研究を加えて全文を書き改めたもの」が、この本である。

(一)鎌倉仏教と禅宗の独立 (二)中世禅林機構の成立と展開 (三)中世禅林と武家社会の三章を、大きな柱としてまとめあげているが、特に曹洞教団については、この本の初めと終りの部分で取りあげている。

先ず第一章は、一一七五年、叡山の覚阿が楊岐派の禅を伝えて以来、南宋禅の諸派が相ついで伝えられたとし、当時、比叡山延暦寺のいわゆる「山門」と、三井寺や園城寺などのいわゆる「寺門」を中心としていた天台教団のなかにあって、自ら葉上流という台密の一流を創始した栄西が、シナに渡って南宋禅を将来し、天台教団からの脱皮を企てつつ、結局は、天台教学に禅をとり入れて内部からの改革をねらい「修正主義の立場を守りつづけた」あとかたを明かにしている。

ついで「道元教団の成立とその北越入山」をとりあげ、旧来の諸説を検討しながら、旧

大日房系の集団入門による勢力増強に、叡山が圧迫を加えたこと、また北越下向の直接動機が『護国正法義』撰述に対するアツレキがあったこと、更には藤原一門の庇護による東福寺の成立等の諸条件のあったことを挙げている。

注目すべきことは、高祖が仁治三年頃から大慧派を激しく批判し、また、これまでの在家仏教容認の布教態度が、北越下向にかけて「徹底した出家至上主義にかわっていったこと」を指摘している点である。かくして第一章には「清規の伝来と流布」の一節のほか、特に永明延寿の『宗鏡録』の流布の重要性和若干附記してまとめあげている。

次に第二章は、安国寺・利生塔の設立——中世禅林の官寺機構(五山・十刹・諸山の展開)——禅律方と鹿苑僧録——中世禅林における住持制度の諸問題——公文と官銭などの節を設け、官僚的色彩の強い宋朝禅が、鎌倉から室町期のわが禅林機構の上に、いかに政治的関連があったかをついている。

第三章でも、足利直義の等持寺創設——斯波義将の禅林に対する態度——足利義満の相国寺創建等にふれ、武家社会との関係を明かし、末尾の二節は、曹洞教団をとりあげ、永平寺系とは別派であった「曹洞宗宏智派」と